

キャンプ期間についての基礎的研究 —中学校教員の意識の分析—

○福田 芳 則
(大阪体育大学)

五 林 正 隆
(大阪社会体育専門学校)

高 見 彰
(関西保育専門学校)

学校キャンプ・キャンプ期間・中学校教員
はじめに

知識偏重による詰め込み教育、受験教育などと呼ばれる現在の教育環境が指摘される一方、「ゆとりある充実した」教育の必要性が叫ばれている。学校教育の過密なカリキュラムを解消し、学習内容を豊かにするために自然のふとこで仲間と寝食を共にし、直接的な生活体験、学習が期待できる教育環境として学校キャンプがあげられる。そしてこの学校キャンプは、様々な野外活動を総合的に実践できる場としてとらえられ、学校におけるレクリエーション活動の中で重要な位置をしめるものと思われる。

スキー・登山等をメインプログラムにした野外活動行事の増加、文部省の自然教室推進事業、セカンドスクール構想など、最近では、学校教育における野外活動の重要性も改めて見直されてきている。師岡は、デルファイ法を用いた小・中学校における野外教育についての将来予測で、1987年頃には学習指導要領に野外教育が明文化され、2000年頃には、多くの学校が野外活動を取り入れていることを予測している。¹⁾

これらの活動をさらに拡充するための問題点として、プログラム・指導者・施設・管理面等が指摘されている。^{2) 3)} 指導の現状として、実施校の教員にその企画・運営をゆだねている学校が多く、その成否は教員に負うところが大きいといっても過言ではない。また学校キャンプの実施期間としては、中学校の場合、種々の理由で1泊2日に限定されているのが現状で、移動に大半の時間を費やし、実施プログラムも野外炊事・ハイキング・キャンプファイヤーなどの画一的なくいくつかのものにかぎられている。飯田は、移動に費やす時間、経費、子ども達の環境への適応という点から4泊5日が効果的な学校キャンプの期間であり、アメリカにおいてはほとんどが4泊5日で実施されているとしている。³⁾ もう1～2泊でも学校キャンプの期間を延長することが可能であれば、その教育的効果・レクリエーション活動の拡充も今以上に望めるものとおもわれる。そこで本研究の目的は、学校キャンプの期間を規定する要因について、中学校教員を対象とし、その意識の面から考察を加え、学校キャンプの期間延長の可能性をさぐるとともに、キャンプの期間を考える上での基礎的資料を得ようとするものである。

方 法

大阪府茨木市内の中学校教員を対象に、学校キャンプ期間に対する意識について、質問紙による調査を行なった。調査時期は1985年11月20日～12月10日で、有効回答数(率)は、12校145名(60.8%)であった。

分析の方法は、1. 適当と考える学校キャンプの泊数と、(1)性別(2)年代(3)担当教科(4)経歴(5)好嫌感との関連 2. 学校

キャンプ期間に影響をおよぼす要因23項目の5段階評定得点結果と、1であげた適当と考える泊数および5つの項目との関連について有意差検定を行ない、比較検討した。1については、前回行なった同様の調査結果もあわせて考察を加えた。⁴⁾ なお、キャンプ期間に影響をおよぼす要因23項目については、キャンプ期間の長短を択一しその理由について自由記述で回答されたものを整理・再構成したものをを用いた。⁴⁾

結果と考察

1. 適当と考える学校キャンプの泊数として得た回答は表1に示した。

表1 適当だと考える泊数×期間

	1泊2日	2泊3日	3泊4日	4泊以上	計
計	40(27.6%)	89(61.3%)	11(7.6%)	5(3.5%)	145

2泊3日を適当としたものが61.3%と5分の3以上をしめ、さらに1泊を含め2泊3日以内と回答したものは、88.9%と全体のおよそ9割におよんでいる。これらは、前回の調査⁴⁾(それぞれ66.3%、85.2%)とほぼ同じ傾向を示していた。1泊の学校キャンプをおこなっている対象校がほとんどで、その活動を基準として泊数を考えたことが推測される。

適当だと考える泊数と、性別、年代、教科、経歴、好嫌感についての比較は、図1～5に示した。なおX²検定は、比較項目ごとに1泊と2泊、2泊以内と3泊以上について行なった。

図1-1 回答者 性別

男性 98人 (67.5%)	女性 47人 (32.5%)
----------------	----------------

図1-2 性別×泊数

性別	1泊2日	2泊3日	3泊4日	4泊以上
男性	24人 (24.5%)	61人 (62.2%)	9人 (9.2%)	4人 (4.1%)
女性	16人 (34%)	28人 (59.6%)	1人 (2.1%)	2人 (4.3%)

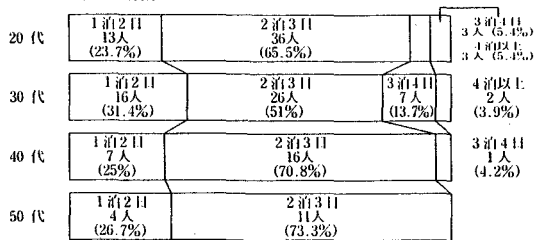
X²検定結果 有意差なし

(1) 性別(男女差)における比較では、有意差はみられなかった。これは前回の調査⁴⁾と同様の結果であった。

図2-1 回答者 年代

20代 55人 (37.9%)	30代 51人 (35.2%)	40代 24人 (16.5%)	50代 15人 (10.2%)
-----------------	-----------------	-----------------	-----------------

図2-2 年代×泊数



X²検定結果

2泊以内よりも3泊以上を志向する-30代以下>40代以上 P<0.05

(2) 年代における比較でみると、30代以下の方が40代以上よりも、2泊以内よりも3泊以上を志向している。前回の調査結果⁴⁾では、今回と同様の差はみられなかったものの、20代の方が30代以上よりも、2泊以内よりも3泊以上を志向し、30代以下の方が40代以上よりも1泊よりも2泊を志向していることがわかっている。これらのことから、若い年代の方がより長いキャンプ期間を志向していることが伺えよう。

図3-1 回答者 担当教科

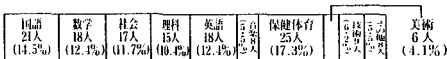
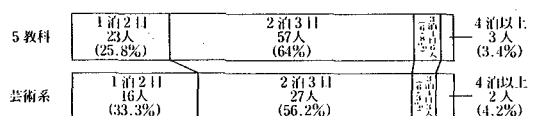


図3-2 担当教科×泊数



X²検定結果 有意差なし

(3) 担当教科と泊数においては、主要5教科(国語・数学・理科・社会・英語)担当者と芸術系教科担当者(音楽・美術・保健・他)とを比較した結果有意な差はみられなかった。

図4-1 回答者 引率経験

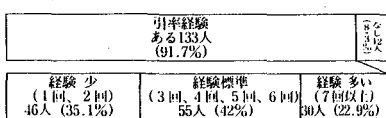
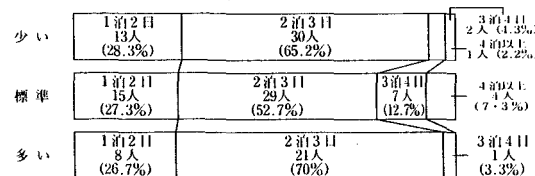


図4-2 引率経験回数×泊数



X²検定結果

2泊以内よりも3泊以上を志向する-経験標準>経験多 P<0.05

2泊以内よりも3泊以上を志向する-経験標準>経験少 P<0.05

(4) 今回は引率経験のみをとりあげた。平均経験回数±0.5標準偏差にあてはまるものを経験標準群、それ以下、以上をそれぞれ経験少、経験多群として比較した。

2泊以内と3泊以上を比較した場合経験標準群が経験多群、

少群よりもいずれも有意に3泊以上を志向している。しかし経験の多少という意味においては関連は認められないであろう。

前回の調査⁴⁾においても、引率経験と泊数との関連には有意な差はみられなかった。今回は分析できなかったが、キャンパーとしての経験の多少、最長経験キャンプ期間の長短、キャンプ講習会の参加の有無等が関連していることがわかっており、今回の結果もそれらに起因しているものと思われる。

図5-1 キャンプに対する好嫌感

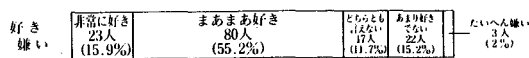
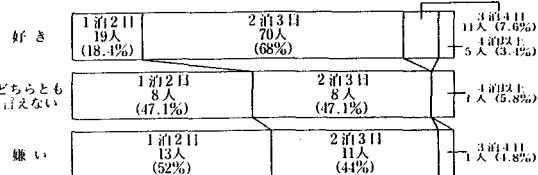


図5-2 好嫌感×泊数



X²検定結果

1泊より2泊を志向する 好感群>嫌感群 P<0.005

1泊より2泊を志向する 好感群>中間群 P<0.05

(5) キャンプ、野外活動の好嫌感をみた場合約70%の人が好きという反応を示している。それに対して嫌いと答えた人は、約17%であった。1泊と2泊の比較においては、好きと答えた人の方が、嫌いと答えた人より2泊3日を志向している。なお10%水準ではあるが、2泊以内より3泊以上を志向する傾向が、みられた。これらは、前回の調査結果⁴⁾と同様である。

2. 学校キャンプの期間に影響をおよぼす要因23項目に対する5段階評定の得点結果を、平均値の高い順から表2に示した。

表2 学校キャンプの期間に影響をおよぼす要因

順位	項目	全体X	S	D
1	教員のキャンプ経験、技術が要求される	(指) 4.000	0.993	
1	準備活動が多忙になり、引き受け手等に問題がおきる	(指) 4.000	0.942	
3	指導者の人数が不足する	(指) 3.965	0.967	
4	人数が多すぎて、さらに期間が長くなると、なかなか指導がゆき届かない	(指) 3.924	0.958	
5	教職員の体力、意欲に問題がおきる	(指) 3.875	0.956	
6	プログラムとして何を行えば良いのかという教材面の不足、内容が問題となる	(指) 3.682	1.052	
7	野外活動の専門家が必要となる	(指) 3.648	1.175	
8	教師と生徒、生徒間の相互理解がより期待できる	(指) 3.579	0.894	
9	生徒の体力面で問題が出てくる	(指) 3.531	1.027	
10	時間外、超過勤務が問題となる	(指) 3.517	1.302	
11	利用場所の施設、設備の不備が問題となる	(指) 3.489	1.054	
11	天候の変化等、自然の厳しさをより味わえる	(指) 3.489	1.054	
13	生徒のキャンプに対する資質、能力が必要となる	(指) 3.482	1.007	
14	生徒の社会性や協力の精神に向上がみられる	(指) 3.427	0.948	
15	受入施設が不足すると思う	(指) 3.420	1.217	
16	適切な設備で余裕のあるプログラムが行える	(指) 3.331	1.142	
17	自然をより理解し、愛好するようになる	(指) 3.227	0.970	
18	他の教育活動への支援をきたす	(指) 3.220	1.163	
19	事故がふえ責任問題等がふえる	(指) 3.193	0.973	
20	生徒の負担する経費面が無理である	(指) 3.006	1.151	
21	教職員の経費等、財政的に支援をきたす	(指) 2.689	0.989	
22	生徒の意欲が減退する	(指) 2.655	0.967	
23	保護者の理解が得られない	(指) 2.524	0.874	

表中項目欄の(指)は指導サイドの要因、(受)は施設、勤務責任等といった環境的要因、(自)は、期間延長にともない効果が期待できる目的的要因、(上)はキャンパー自身の主体的要因である。

前回の調査結果と同様、指導サイドの要因が上位のほとんどをしめており、それ以下は、目的的要因、環境的要因、主体的要因が混在している。20位以下は、その平均値からキャンプ期間延長を阻害する要因と考えなくてもよいであろう。なお平均3.00を下まわった3つの項目は、順位は違っているものの前回の調査でも3.00以下を示した項目と全く同じであった。また18位以下の平均値の比較的低い項目も前回と同じ項目であり、そのほとんどが施設問題を除いた環境的要因を主とする項目であった。

実施期間に影響をおよぼす要因を、性別、年代、教科、経験、好嫌感、適当だと考える泊数ごとに比較した結果を表3に示した、有意差のみられた項目には、あわせてそれぞれの平均値も付記した。

- (1) 性別(表3-A)においては、環境的要因に多くの差がみられ、いずれも女性の方が期間延長を阻害する要素として強く受けとめているようである。
- (2) 年代(表3-B)においては、環境的要因に多くの差がみられ、年代が高くなるほど阻害要因として強く受けとめている。また指導的要因においても差が多少みられたが、年代との関連はあまりないように思われる。
- (3) 担当教科(表3-C)においては、主要5教科と芸術系教科では、ほとんど差がみられなかった。
- (4) 引率経験(表3-D)においては、多少の差はみられるものの、全体として関連はないようである。
- (5) 好嫌感(表3-E)においては、環境的要因に差が多くみられ、いずれも嫌感を持っている者ほど阻害要素として強く受けとめられている。
- (6) 適当と考える泊数(表3-F)においては、今後の学校キャンプ長期化の可能性をみる意味で1)、2泊以内と3泊以上について、また、2泊以内を適当としたものが約90%という今回の現状をとらえた上で2)、1泊と2泊について、T検定を行なった。
 - 1)、2泊以内と3泊以上の比較において、多くの要因について有意差がみられた。目的的要因を除いて、すべて2泊以内と回答したの方が阻害要因としてより強く受けとめており、3泊以上と回答したものの平均値は、指導的要因においてのみ3.0以上を示し、他の要因については阻害要因と受けとめていない。
 - 2)、1泊と2泊の比較においては、目的的要因にすべて有意差があらわれ、1泊と回答した者の平均値はほとんど3.0を下回っており、期間延長にともなう効果増をあまり期待、意識していないようである。また指導的要因については、1泊と回答した者はすべて平均値4点台でより強く阻害要因として受けとめている。

まとめ

以上の結果より、以下のことがわかった。

1. 約60%の者が2泊3日を、約90%の者が2泊3日以内を適当なキャンプ期間として考えている。

2. 適当なキャンプ期間に影響をおよぼす要素として、年代とキャンプに対する好嫌感があげられる。若い年代のほうが、またキャンプに対して好感を持っているものの方が、より長い期間を志向していることが明らかになった。

3. キャンプ期間の決定に影響をおよぼすものとして、指導サイドの問題が大きき要因としてとらえられていることが明らかになった。

4. 性別、年代、好嫌感の比較において環境的要因に多くの差がみられ、女性、高い年代、嫌感を持っている人ほどその要因をより阻害的なものとして考えていることがわかった。

5. より長い期間を志向する者の方が、キャンプ効果を期待できる目的的要因をより強く自覚しており、逆に主体的、環境的要因については、短い期間を志向する者の方がより高い不安を持っていることがわかった。指導的要因に対しては、両者とも不安を持っているが、その程度は短期間志向の者の方がより高いことがわかった。

中学校教員の意識を分析することにより、学校キャンプの期間に関する基礎的資料を得たわけであるが、今後の課題として、調査対象の拡大、対象の属性等とキャンプ期間の詳細な分析があげられよう。また、学校キャンプの現状と問題点をより正確に把握し、指導サイドの問題点(技術、経験、専門性、プログラム等)を解決していく方策を考えることも、学校キャンプの長期化を図るために重要な課題であろう。

文 献

- 1) 師岡文男:「野外教育の将来像—小・中学校における位置づけとプログラムについての予測」、『筑波大学体育研究科修士論文』1979
- 2) 福田芳則:「キャンプ期間についての基礎的研究—中学校教員のキャンプ期間に対する意識」、『第33回日本体育学会大会号』739、1982
- 3) 飯田稔:「野外活動を見直す」、『体育科教育』26(8)、1978

表3 キャンプ期間に影響をおよぼす要因×性別・年代・教科・経験・好感・好嫌感・適当と考える泊数

要因	項目	A 性別		B		年 代		C 教科		D 経験		E		好 嫌 感		F 適当と考える泊数			
		① 男	② 女	① 20代×30代	② 40代	③ 20.30代×40.50代	④ 40.50代	⑤ 20.30代×40.50代	⑥ 50代	① 5教科×芸系	② 経験少×標準	③ 経験少×多	④ 好き×嫌い	⑤ 好き×嫌い	⑥ 嫌い×嫌い	⑦ 2泊以下	⑧ 3泊以上	⑨ 1泊×2泊	
指導	教員のキャンプ経験、技術が要求される					③3.396 ※※※	⑥4.266 ※※※												
	準備活動が多忙になり、引き受け手等に問題がおきる	①3.818		③3.896	④4.282 ※												①4.085	②3.500 ※	
目的	指導者の人数が不足する					③3.969	⑥3.533 △										①4.062	②3.250 ※※	
	人数が多すぎて、さらに期間が長くなると、なかなか指導がゆき届かない			③3.753	④3.066 ※												①4.450 ※※※	②3.887 ※※※	
要因	プログラムとして何を伝えたいのかという教材面の不足、内容が問題となる					①3.775	④4.083 △										①4.125 ※	②3.692 ※	
	教員の体力、意欲に問題がおきる	①3.469	②4.021 ※※	①3.981	②3.444 ※※			①4.13	③3.745 ※								①4.375 ※※※	②3.786 ※※※	
環境	野外活動の専門家が必要となる																①3.720	②3.187 △	
	他の教育活動への支障をきたす					③3.075	⑥3.533 ※										①3.310	②3.179 ※※	
目的	時間外、超過勤務が問題となる	①3.346	②3.872 ※※	①3.145	②3.744 ※※	③3.377	④3.817 ※										①3.437	②3.179 ※※	
	生徒の負担する経費で無理である	①2.806	②3.425 ※※※	①3.090	②3.622 ※※	③3.264	④3.846 ※※	①3.111	②2.708 ※								①2.922	②3.647 △	
要因	受入施設が不足すると思う	①3.295	②3.680 △	①3.622	②3.846 ※※					①3.304	③3.833 △						①3.291	②3.96 ※	
	保護者の理解が得られない																①2.485	②3.0 ※	
目的	事故がふえ責任問題等がふえる																①2.589	②2.187 △	
	教職員の経費等、財政的に支障をきたす	①3.326	②3.829 ※※	①3.254	②3.633 ※	③2.575	④3.000 ※										①3.279	②3.625 ※	
主体	利用場所の施設、設備の不備が問題となる			①3.854	②3.333 ※※※	③3.396	④3.743 △										①2.521	②2.933 △	
	生徒の体力面で問題が出てくる																		
目的	生徒の意欲が減退する					①2.514	②2.815 △											①2.697	②2.250 ※※
	生徒のキャンプに対する質、能力が必要となる	①3.346	②3.765 ※			③3.515	⑥3.266 △										①3.565	②2.812 ※	
目的	天候の変化等、自然の厳しさをより味わえる																	①3.175	②3.696 ※
	生徒の社会性や協力の精神に向上がみられる																	①3.372	②2.750 △
目的	適り豊富で余裕のあるプログラムが行える																	①3.812	②3.651 ※※
	自然をより理解し、愛好するようになる									①2.956	③3.4 △						①2.193	②2.250 ※※	
目的	教師と生徒、生徒間の相互理解がより期待できる																	①2.6	②3.117 △
																		①2.900 ※※※	②3.820 ※※※

※1 経験多×経験少 有意差なし

※ P<0.05
 ※※ P<0.01
 ※※※ P<0.005
 △ P<0.1